

帝国の風景——満洲における桜の名所「鎮江山公園」の誕生

高 媛*

Imperial Landscape: The Birth of Cherry Blossom Park “Chin-Kō Zan Park” in Colonial Manchuria

En KO

要旨：

満洲と朝鮮の国境の町安東（現丹東）にある「鎮江山」は、日露戦争中の1905年4月、臨済宗妙心寺派の僧侶・細野南岳によって命名された山である。細野は鎮江山の中腹に臨済寺を建て、朝鮮半島や日本内地から桜の苗木を移植した。1910年代に鎮江山は南満洲鉄道株式会社によって大規模な植林が施され森林公園として整備されてきた。続いて、1929年には『大連新聞』主催の「満洲八景」公選イベントで、鎮江山は「第一景」に選ばれ、一躍有名になった。さらに、満洲国時代（1932—1945年）には、満洲国域内唯一の桜の名所として、鎮江山公園は「母国日本発展の象徴」から「新興満洲国の民族協和」の聖地へと、新たな意味づけを付与されるようになった。本稿は、日露戦争から満洲国時代にかけて形作られてきた鎮江山公園の知られざる歴史を辿り、風景の形成・改変・馴致の中にかなる帝国の暴力が内包されているかを解明する。

キーワード：満洲、風景、桜、公園、帝国

Keyword: Manchuria, Landscape, Cherry blossom, Park, Empire

1 はじめに

近年、「風景と権力」に焦点を当てた研究は、主として欧米の学者の間で盛んに行われている。たとえば、W.J.T. Mitchellは「風景」(Landscape)という言葉は「名詞」としてより「動詞」として捉えるべきだと指摘している¹。この指摘は「誰が風景を所有しているのか」、「風景はいかにして風景となり得るのか」といった一連の問いを触発し、風景の背後にさまざまな制度的・社会的諸関係が絡み合っていることを示唆している。

一方、日本の植民地史に関する先行研究は、主として軍事、経済、交通、建築などの分野

に集中し、「風景」というテーマをまともには取り上げてこなかった。本稿は、「帝国の風景」という概念を提起し、満洲における桜の名所「鎮江山公園」を手がかりに、風景の形成・改変・馴致の中にかなる帝国の暴力が内包されているかを解明する。

帝国日本による植民地への桜の移植については、これまでいくつかの研究が行われている。たとえば、顔杏如は戦前台湾における桜の移植を題材にし、在台日本人が桜に付与した意味が「内地風景」の発見から「国民精神の昂揚」へと変化したことを明らかにした²。また、竹国は日露戦争時の軍事都市鎮海に焦点を当て、桜をめぐる日韓両国におけるナショナリズムの言

* グローバル・メディア・スタディーズ学部講師

付記：本稿は2011年度在外研究（米ハーバード大学ライシャワー日本研究所）の成果の一部です。ライシャワー日本研究所のGordon先生、Elliott先生、国立台湾大学の蘇碩斌先生をはじめ、多くの方々から貴重なコメントを頂戴しました。まとめて記し感謝申し上げます。なお、本稿の一部を2012年8月10日チェコ・プラハで開かれた第15回歴史地理学者国際会議（International Conference of Historical Geographers）にて英語で口頭発表しました。

説について分析した³。

一方、桜と軍国主義との関係を検証した人類学者大貫恵美子は、「日本人がアジア諸国の植民地化に積極的に乗り出した時期、わざわざ現地自生の桜の樹を探したり、日本から持ってきた桜の苗木を植林したりした。これは、主に侵略した地に日本帝国領だという象徴的判を押す行為であったが、これによって植民地の日本人は、花見を含め、日本式生活を享受したのである」と、ごく簡単に指摘したに止まり、詳しい論述は加えていない⁴。

なお、満洲と桜についての先行研究はほとんど見当たらない。本稿は、公文書、報告書類、新聞・雑誌記事、旅行パンフレットなどを手がかりに、日露戦争から満洲国時代にかけて形作られてきた鎮江山公園の未詳の歴史の綿密な検討を通して、日本帝国による満洲における風景の発見・創出・領有といった一連の構想・営為の経過を明らかにすることを目指す。

2 「鎮江山公園」の誕生

2.1 「鎮江山」の命名

満洲は、日清戦争（1894—1895）・日露戦争（1904—1905）という、帝国日本の膨張の歴史を刻む二大戦争の戦場として知られている。この二つの戦争は、満洲における桜の移植にも重要なきっかけを作ることになった。

日清戦争中、第二軍司令官大山巖は、金州を陥落させたのち、日本から桜樹を取寄せ、司令部の邸内と金州城内の各所に移植した。「是は支那を日本の占有とし日本化しようと云ふ理想から第一着手として大和心の表象である山桜を植ゑられたものであらう」と、当時大山の部下であった第二軍参謀井口省吾は、大山の狙いについて推測している⁵。

金州から軍を引き揚げる前に、大山は、部下たちから「桜」と題する詩歌を募集し、自らも

一首「植ゑ置きて我は大和へ帰るとも／朝日に匂へ山桜花」を残した⁶。しかし、日清戦争後、独仏露の三国干渉で遼東半島は清国に返還させられ、日本の満洲領有の夢は一時頓挫することになった。その10年後、日露戦争時の満洲軍総司令官として再び金州に立ち寄った大山は、かつての桜はすでに跡形もなく枯れていたことを知らされたという⁷。

日露戦争中の1905年4月、朝鮮に接する満洲側の国境都市安東（現丹東）^{あんとう}では、ある日本人が桜の移植計画を着々と進めていた。その人物の名は細野南岳（1868—?）^{ほそのなんがく}と言ひ、臨済宗妙心寺派の僧侶である。細野は早い時期から積極的に海外布教を推進してきた人物で、日清戦争後の1896年には台湾に渡り、台北鎮南山における臨済寺の建立に尽力し、続いて1899年から1903年にかけては清国南部にある福州で布教活動に従事していた⁸。

日本が安東を占領し軍政を布いたのは、日露戦争中の1904年5月から戦争終結の翌年（1906年）10月までである。1904年10月、第二代安東軍政官・大原武慶^{おおはらたけよし}（在任期間1904年6月—1905年7月）⁹は「戦病死者忠霊菩提の為め国家鎮護の道場を建立せんことを念願し」、当時大和国吉野山東南院の住職を務めていた細野宛に招聘状を送った。大原が細野を招いたのは、安東の軍政署で土木課長を務める松本無住という人物の推薦によるものといわれる¹⁰。松本はかつて細野が台湾と福州で布教した時、在家信徒として尽力していた¹¹。

1905年4月1日に安東に到着した細野は、いろいろなところを踏査した結果、当時「無名の禿山」に過ぎなかった山を「鎮江山」と命名し、山腹に寺の建立を急いだ¹²。

鎮江山は海拔90メートル余り¹³で、麓に安東市街を俯瞰し、鴨緑江を隔てて朝鮮の新義州を望むことができる。「鎮江山」の名は、台北の臨済寺が建てられた山「鎮南山」に由来する。

細野はかつて日清戦争後台湾に渡り臨濟寺の開創に尽力した経緯から、「大日本帝国の南方を鎮護すると云ふ大願から」名づけられた「鎮南山」の名称を思い出し、同じく「満鮮両国を鎮護し奉る」という祈願を込めて、安東の山を「鎮江山」と命名したのである¹⁴。

1905年4月3日、安東に到着して3日目に、細野は、寺の境内地として「山林35町歩」を軍から下付され、山道作りや植物の植込みなどにおいても軍の援助を得た¹⁵。同年5月27日には早くも庫裡の一部が竣工し、細野は大和国吉野山東南院より勧請した如意輪観世音菩薩を本尊として安置した¹⁶。

「全くの禿山」の鎮江山では土砂の崩壊が甚だしいことに鑑み、細野は植林の重要性を痛感した。とりわけ、「桜の花がなかつたら日本人の発展を阻害することであらうと思ひ、第一に桜を植へる事に決心した」と語る細野には、「日本人の発展」の象徴としての桜の移植に特別な思い入れがあった¹⁷。

鎮江山に最初に桜が植えられたのは、1905年4月、神武天皇祭で遙拜式が挙行された「櫃ヶ岡」というところである。この時の記念として、細野は、白馬山からは朝鮮の桜を、東京からは吉野桜の苗木約20本を取り寄せて植えた¹⁸。同じく1905年秋には、大和吉野山から「純粹」な吉野桜を千本移植したが、気候の関係でわずかししか生き残らなかった。翌1906年春にも、細野は桜樹千本と落葉松3千本を植えるなど、1913年末帰国するまで年々植林に力を入れていった¹⁹。

後年、大原武慶と細野南岳はしばしば鎮江山の「功労者」「開山の恩人」として称えられ、1934年大原の「頌徳碑」が鎮江山に建立され²⁰、細野も1926年と1933年に鎮江山を再訪している²¹。

2.2 鎮江山公園の形成

1906年11月、半官半民の国策会社・南満洲鉄道株式会社（略称「満鉄」）が設立され、鉄道

経営および附属地の都市計画などに着手した。安東では1907年4月に満鉄安東経理係（のちの「安東地方事務所」）が設置され、安奉線（安東・奉天間）鉄道附属地内の行政事務を管掌することになった²²。その業務の一環として、鎮江山を公園として整備する計画が推進された。

1910年、満鉄は農商務省林務技師・林学博士の白澤保美に各附属地の公園設計を依頼した²³。1912年1月に白澤が提出した「安東公園改良設計説明書」には、鎮江山は「市街地公園」としてよりは「寧ろ自然的の風致を利用し森林の遊園地と為すべきものなれば自然的風致を主として多くの人為的設営を為さず、只乗駆散策に供する道路を開設し溪流を修築し僅かに南隅突出地に倶楽部、運動遊戯場の設置をなせり」と、「自然的風趣」を大切にの方針が明記されている²⁴。

しかし、白澤の設計案は、出来上がりはしたものの、満鉄の経費不足のため、直ちに実行に移すことは出来なかった。一方、1911年11月に満鉄安東経理係長に着任した松本壘逸は、地方経費の一部を植林に廻したり、自ら鎮江山に入り浸り木を植えたりして、鎮江山の緑化を最優先に奔走していた。そのあまりの熱中ぶりに、「時の会社幹部に睨まれ免職の話まで出た」という²⁵。松本在任中の4年1ヶ月間に、鎮江山は、森林公園としての基盤が築き上げられたと評価されている。のちに彼は「満洲緑地の恩人」と賞賛され、その業績を称えた頌徳記念碑が1938年に鎮江山公園内に建立された²⁶。

また、松本の後任・安東地方事務所長の横田多喜助（在任期間1915年11月—1916年12月）が、1912年の白澤案を実行に移し、5ヶ年継続事業として大規模な鎮江山公園計画に取り組み始めた。

第一期工事は翌1916年2月から7月にかけて行われ、公園の入口に広場を設け、樹木を植栽し、溪流を活かして池水を作り、噴水、道路、橋、ベンチ、四阿などの施設も整えた。

1927年にはコンクリート製固定ベンチ20脚

表1：鎮江山公園の累年経費（1910～1934年度）

年次\経費別（円）	創設費	維持費	合計
1910	830.00	—	830.00
1911	347.00	528.00	875.00
1912	211.00	1,911.00	2,122.00
1913	572.00	2,063.00	2,635.00
1914	—	1,651.00	1,651.00
1915	211.00	1,676.00	1,887.00
1916	500.00	3,824.00	4,324.00
1917	—	2,731.00	2,731.00
1918	—	5,473.00	5,473.00
1919	—	6,941.00	6,941.00
1920	—	8,205.00	8,205.00
1921	233.00	7,760.00	7,993.00
1922	—	5,752.00	5,752.00
1923	—	5,636.00	5,636.00
1924	1,427.00	6,122.00	7,549.00
1925	2,967.00	6,873.00	9,840.00
1926	—	6,180.06	6,180.06
1927	919.56	5,867.16	6,786.72
1928	105.97	6,197.18	6,303.15
1929	—	7,793.97	7,793.97
1930	—	8,246.32	8,246.32
1931	—	7,493.19	7,493.19
1932	710.00	8,397.43	9,107.43
1933	—	7,823.74	7,823.74
1934	800.00	14,105.76	14,905.76

出典：南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』南満洲鉄道株式会社、1939年、819-820頁

が増設され、翌1932年と1936年には、それぞれ臨濟寺前から頂上に至るドライブウエーと、頂上から領事館側に通じる2本のドライブウエーが完成した。1939年の時点で、吉野桜2,750本、牡丹桜500本、朝鮮山桜700本、松15,500本などが栽植され、鎮江山公園は「満鮮を通じ第一等の森林公園」と言われるようになった²⁷。その面積は、1926年の時点で29.7万平方メートルに達した²⁸。

表1は1910年から1934年にかけて満鉄安東事務所が毎年鎮江山公園の創設・維持にかけていた経費である。満鉄は継続して鎮江山の設備投資に力を入れていたことが分かる。また、表2に示された通り、鎮江山公園の施設の経営管理者は満鉄のほかに、陸軍、臨濟寺、神社と個人に分かれている。安東神社は、1905年当初軍政

署内に建立されたものである。その後、安東神社は一度新市街の中心地に移転されたが、1924年5月鎮江山に遷座した²⁹。御嶽神社は安東神社の境内にあり、「有志石崎氏寄進二係り燦爛タル堂宇ハ能ク衆目ヲ喚ビ境内ノ一美観ヲ副フ」。八幡宮は筑前宮崎八幡宮の分霊を奉祀したもので、1912年4月鎮江山の中腹に建てられた。また、稲荷神社は新遊園地にある料理業者の設置によるもので、「特種婦人ノ帰依信心スル者多シ」といわれている³⁰。

一方、陸軍が管理している「表忠碑」は、1905年10月日露戦役で戦死した1,091名将卒を祀るものである。もともと旧市街沙河鎮の方であったが、「この位置は一方に偏し過ぎて参拜に不便を感ずるので、鎮江山に移すことに決し」、1910年6月に前述した桜が初めて栽植さ

表2：鎮江山公園の施設（1923年と1939年）

経営管理者	1923年現在 ①	1939年現在 ②
満鉄	八幡宮神社、安東停車場地築工事殉難者供養塔、公園事務所1棟、温室1棟、樹木見本園1ヶ所、橋梁23ヶ所、四阿4棟、共同腰掛25脚、泉水3ヶ所、噴水1ヶ所、電燈11箇、馬繋場1ヶ所、共同便所2棟、運動具（鞦韆、遊動圓木）各1、花畑1ヶ所	公園事務所、温室1棟、四阿7棟、展望台、共同腰掛97脚、共同便所、藤棚4、樹木見本園、花園、噴水2箇、泉水4ヶ所、瀧3ヶ所、運動場1ヶ所、馬繋場1ヶ所、橋梁5、動物舎10棟、碑石5基、電燈48燈、国旗掲揚塔1基、大砲1基
陸軍	表忠碑1基	表忠碑1基（鳥井1基、神馬1基、燈籠6基）、水準基1基
臨濟寺	寺院本堂1棟、附属家屋3棟、山門1棟、鐘楼1棟、金鼓堂1棟、観音銅像1基、88ヶ所佛像、33番佛像	寺院本堂1棟、附属建物3棟、山門1棟、鐘楼1棟、観音銅像1基、88ヶ所佛像、33番佛像、碑石1基、湧水池1箇所
個人	茶亭1棟	茶亭1棟、附属建物1棟、碑石1基
神社	—	八幡宮、附属建物44棟、御嶽神社、金比羅宮、稻荷大明神、鳥井4基、神馬2基、橋梁1

注：①永田正吉「安東鎮江山公園」『庭園』第5巻第2号、庭園協会、1923年2月、14-15頁に基づいて作成

②南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』南満洲鉄道株式会社、1939年、819頁に基づいて作成。表記は原文のまま。

れた「櫃ヶ岡」に建立された。満洲事変後さらに納骨数が増え、1935年末現在3,163体に達した³¹。

お寺、神社といった安東日本人の信仰地や、表忠碑といった日露戦争戦死者を記念する場所などが揃い、鎮江山公園は行楽地だけでなく、在満日本人の生活に密着した社会的機能を持つ場所でもあった。

3. 「満洲八景」公選第一位

鎮江山公園の名を全満に一躍有名にしたのは、1929年『大連新聞』主催の「満洲八景」公選イベントであった。筆者は旧稿で『大連新聞』の歴史的な位置づけと「満洲八景」の実施経緯について論じた³²。本稿では「満洲八景第一景」に選ばれた鎮江山の当選過程に注目し、それにまつわる言説とその後の観光誘致について検討

を加えていく。

3.1 鎮江山後援会

「満洲八景」は1920年から1935年にかけて大連市で発行されていた邦字日刊新聞『大連新聞』が創刊十週年記念イベントとして実施したものである。このイベントは広く関心を集め、1929年3月5日から4月5日までの総有効投票数は3,552,499³³である（図1と表3参照）。1929年末の在満日本人（内地人）の人口は216,167人であるから³⁴、一人あたり約16票以上を投じたことになる。

『大連新聞』には投票開始日の2日後3月7日から4月7日にかけて、毎日、有力な景勝地の投票数と投票順位が発表されていた。これらを追っていくと、「鎮江山」が初めて上位（3位）にランクインしたのは、投票戦中盤の3月20日であったことが分かる。その後、20位まで転落し



図1：1929年4月10日『大連新聞』夕刊2面。「満洲八景」イベントの投票結果と順位が掲載され、上位13位の景勝地は、得票数の多い順にそれぞれ「満洲八景」と「満洲五勝」に定められた。(紙面の欄外の日付は「4月11日」となっているが、1面の題字下には「夕刊4月10日」と記載されている。本稿では後者の表記に従うこととする。以下同様)

表3：「満洲八景」と「満洲五勝」の所在地と得票数

順位	八景名	所在地	得票数
8-1	鎮江山	安東	353,327
8-2	星ヶ浦	大連	322,226
8-3	龍首山	鉄嶺	295,913
8-4	熊岳城温泉	熊岳城	291,584
8-5	老虎灘	大連	291,132
8-6	白玉山	旅順	289,682
8-7	松花江	吉林	275,452
8-8	釣魚台	橋頭	272,503

順位	五勝名	所在地	得票数
5-1	幡龍山	大石橋	190,795
5-2	長春西公園	長春	189,626
5-3	太子河	本溪湖	163,822
5-4	稻荷山	柳樹屯	138,535
5-5	大和尚山	金州	131,664

出典：1929年4月10日『大連新聞』夕刊2面の記事により作成。高媛「租借地メディア『大連新聞』と『満洲八景』、『Journal of Global Media Studies』第4号、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、2009年3月、30頁

たこともあったが、投票最終日4月5日にはいきなり1位に躍り出て、結果的に「満洲八景第一景」の座を獲得した。鎮江山の得票数353,327票は総投票数の1割近くを占め、1929年末の安東在住内地人総数11,748人³⁵の約30倍を上回ったこ

とになる。

鎮江山の票が驚異的に躍進したのは、「鎮江山後援会」をはじめ安東市民による熱心な集票活動によるものと見られる。後援会結成の契機は、1929年3月当時安東地方事務所地方係長大

岩銀象宛に届いた一市民からの投書であった。

「その内容は満洲八景中に名実共に価値ある鎮江山を公選し安東の繁栄の資にも供したいから御賛同御尽力を乞ふといふ意味でした」と大岩は後年振り返る。大岩は早速各区長を召集し意見を求めたところ、「鎮江山は八景の第一に挙ぐべき価値あり須く第一位当選を期して努力すべきである、是れが一には我安東の繁栄策である」との決議に至った³⁶。

その後、各区長は資金集めに奔走し、投票用紙となる『大連新聞』の切抜や葉書の収集に努めた。「地方事務所会議室の本部には毎日区長や其他有志から送り届ける年賀状その他の古葉書を刷り替へたもの、新聞切抜の投票用紙や資金で埋高く積りました、地方係員はこれを整理して何時にても発送し得る準備を整へて置きました」³⁷。

もともと、安東のみならず、ほかにも「後援会」を結成して投票活動を繰り広げている地方は少なくない。そこで、鎮江山後援会が採った作戦は「各地の情報を探り、内部的には常に各地を凌駕するだけの準備を整へ紙上発表には鎮江山は常に下位に置いて徐々に進み最初より首位を争つて各地の競争心を唆るやうなことは全然避けて、最後に首位を占めんとする策戦」であった³⁸。さらに、投票戦の終盤になると、鎮江山後援会は「代表を大連に派して戦況を視察」したり、「最後の五分間に巨弾を投ずる」³⁹秘策を展開したりして、最終的に鎮江山を第一景当選に導いたのである。

一方、「満洲八景」イベント中に、鎮江山の魅力はどのように語られ、また認知されていたのか。3月31日付『大連新聞』に、「在満一邦人」と名乗る人の投稿があった。投稿内容からは安東在住の日本人かどうか明らかではないが、投稿者は「特に日露の役に火蓋を切つた最初の土地である」安東の鎮江山を第一位に当選させたいと呼びかけた。さらに、「それは安東市民の

叫びのみではありません、全満邦人の叫びでなくてはならぬと思ひます。それを単に郷土愛、郷土的と云ふ狭い見でなく理想投票と云ふ立場から考えまして御願致します、[中略]鎮江山が名実揃はぬ所であればやむを得ませんが附属地でもあり歴史も古い土地であり日本人を表徴する桜の名所であり華人に桜を紹介することは母国を紹介する第一歩とも思ひます。桜を紹介することは日支親善の又第一歩であると思ひます」⁴⁰。

この投稿からも読み取れるように、投稿者は鎮江山を当選させることは、安東の住民だけでなく、在満日本人全体にとっても意味のあることだと訴えている。単なる安東だけの「郷土愛」を超えて、大局的に「満洲の代表的風景」を選ぶ視点から、投稿者は鎮江山の価値を強調している。すなわち、ここは「日露戦跡」と「桜」といったナショナル・シンボルの揃った名所なのであると。

このような認識は、大連新聞が鎮江山の当選記念として募集した「鴨緑江節」の優秀作品からも読み取ることができる。「鎮江山大和男子の花が咲く／八景たづねて来て見れば／昔いくさの夢の跡／吹雪く桜の表忠碑」⁴¹と、同じく「桜」と「日露戦跡」との組み合わせで鎮江山の魅力を表現している。

3.2 鎮江山への観光誘致

1929年の「満洲八景」イベントは鎮江山の観光誘致に拍車をかけた。そこで重要な役割を果たしていたのは、満鉄、大連新聞社と安東観光協会である。

1931年春には、満鉄は初めて、安東、旅順、大連行き5人以上の観桜団体客向けに往復汽車賃5割引の誘致策を断行した⁴²。1930年11月9日、満鉄安東地方事務所長井上信翁の揮毫による「満洲八景公選第一位鎮江山」記念碑が建立された。総工費は800円で、そのうち大連新聞

社からは200円、残りの600円は安東市民からの寄付で賄われた⁴³。「満洲八景」と「満洲五勝」に当選した13箇所の景勝地のうち、記念碑が建てられたのは、鎮江山と蟠龍山の2箇所だけであった⁴⁴。この記念碑は鎮江山の絵葉書や1937年満鉄が製作した観光映画『内鮮満周遊の旅・満洲編』にも登場し、「満洲八景公選第一位」の称号は鎮江山に新たな価値づけを付与することになった。

1929年4月、「満洲八景」イベント後の最初の花見シーズンに、大連新聞社安東支社長の発案で、夜桜の鑑賞のために電気の雪洞が設置された。これは「各方面の高評を博しその上桜の開花中色々な催物をなすのでこの期間中の観桜客の延人員五十万といふ豪勢である」という⁴⁵。翌1930年春には、雪洞を広告として活用したいと地元の商店からの申込が殺到し、「ビール会社、酒造業者は一軒にして十数本を申込みものありとても高さ四尺もある雪洞を樹て、五百燭光の電燈を点じたといふ非常に意気込みで」観光シーズンを迎えたという⁴⁶。

「満洲八景」イベントの翌年（1930）に、安東では早くも「外客誘致委員会」が創設され、1934年に「安東景勝委員会」と改称され、さらに1936年11月には「安東観光協会」に改組された。安東観光協会は全市民を会員とし、市公署、商工会の補助金と事業益金をもって経費に充て、臨時事業は一部寄付金をもって行われる⁴⁷。1936年5月10日、安東景勝委員会は鎮江山臨済寺の境内から全満向けに「鎮江山桜の夕」と銘打ったラジオ実況放送を行った⁴⁸。この日満鉄沿線や朝鮮から殺到した花見団体客は5,000名に達した⁴⁹。

4. 中国人にとっての桜と鎮江山公園

顔杏如の研究によると、1930年代の台湾では、知識階級だけでなく、一般台湾人の間でも

桜を鑑賞するようになったという⁵⁰。それに比べれば、満洲の中国人は桜への馴染みが薄く、お花見の習慣も定着していないようである。

1935年の『大連新聞』の記事によると、満洲に野生の桜はあることはあるが、「内地のものに比して花や木も貧弱なもので、満洲では内地の桜が木の花の代表的なものであると同様に満洲では、李の花が木の花を代表して桜は満人間には喜ばれず、観賞されてゐない様」⁵¹だという。

『大連新聞』には「奉天支那側巨頭袁金凱、王樹常其他一行十余名は鎮江山桜花見物に来ることになった」⁵²や「満洲国要人に観桜の招待状を發する」⁵³などの記事は散見するが、一般の中国人のお花見に関するニュースはほとんど見当たらない。

一方、1925年頃、中国語新聞『泰東日報』⁵⁴には、鎮江山で朝鮮人が強盗に遭ったことや、中国人銀行家の息子が拉致されそうになったとの記事が出ている⁵⁵。日本人のみならず、現地の人たちも行楽地として鎮江山公園を訪れていたことが推測される。

「満洲八景」イベントと同じ1929年に、安東の中国側行政機関（市政籌備處）が中国人街にある「元宝山公園」の整備計画を発表した。休憩所や球場の新設や樹木や草花の増植などを施す計画で、竣工すれば「鎮江山に遜色をとらない」と『泰東日報』の記事が締めくくっていることから、鎮江山公園を意識していることがうかがえる⁵⁶。

元宝山公園は1911年に開園したものである。創設者の程進元は1857年生れの中国人実業家で、1909年に鴨緑江採木会社の理事長を務めた人物である⁵⁷。彼は「日本に遊び、帰来市民公園の必要を提唱し、支那当路並に有力者を動かして」、約3万円の創立費を投じて実現させた⁵⁸。元宝山公園は中国人に親しまれ、1931年6月編纂された中国側の地方誌『安東県誌』には、この

公園についての漢詩が数多く収録されている⁵⁹。

元宝山公園よりは少ないが、同じ『安東県誌』には鎮江山公園を詠った漢詩も5首ばかり掲載されている。そのなかに、鎮江山は夜も電燈が点され、園内はとても明るいと詠われたものもあった⁶⁰。このような近代的な設備が揃っている鎮江山への羨望がある一方、日本風に変貌してしまった風景を屈折した気持で眺めている人もいる。たとえば、「李洵」という中国人は鎮江山を訪れた時の複雑な心境を次のように綴った。

鎮北多青山、一山鎮江矗。敷地九万坪、森森雜林木。樵斧不敢來、牛羊不敢牧。覓徑撥白雲、盤曲入深谷。不禁華人游、樓台誰之屋？日婦負日子、嬉戲異言服。風俗為所移、土地虞他屬。雖或登其巔、弗識真面目。小憩翠微里、幽鳥時相逐。流連往而復、踽踽我行獨。遍地蠻草花、觸鼻亦芬馥。放眼望四方、大江繞鴨綠。風景猶不殊、韓民今誰屬？天意何茫茫、強食弱者肉。莫謂此區區、而忘國日蹙⁶¹。[下線は引用者]

筆者訳：鎮北には青山が多くあり、その一つ、鴨緑江を鎮める鎮江山がそびえ立つ。敷地九万坪、森が鬱蒼としている。樵も躊躇するし、牛や羊もここまで入って来ない。鎮江山の真の姿を探すべく（僕は）白雲を払い、曲がりくねった道を辿り深い谷に入る。ここを華人が訪れるのは堪えがたい。建っている楼閣は一体誰のものか？日本の婦人が日本の子どもを背負い、服も言葉も異国のもの。風俗も改変され、土地も奪われかねないと憂慮する。山頂に登ったとしても、この山の真の姿が分からない。森の中で少々休憩し、鳥が仲間を追い回している。何度も行来して、独りで歩く。至る所に蛮人の草花があふれ、芳しい香りが漂う。四方を眺めれば、鴨緑江が

広がる。風景こそ変わっていないが、韓の民は今は誰に属しているか？天意は何と茫茫たるものか、弱肉強食の世のなかだ。些細なことと看過し、わが国力が日々衰えていることを忘れること無かれ。

この詩のなかで、李は鎮江山の風景を楽しむどころか、違和感さえあらわにした。行き交う人も日本人で、目にする植物も「蛮人の草花」ばかりである。すっかり日本風に変貌してしまった鎮江山を見て、かつて日本に併合された朝鮮半島のように、中国も国土が蝕まれて国力が落ちていると、李は懸念を示した。桜の名所としての鎮江山を「日本発展の象徴」「日本帝国支配下の満洲を代表する風景」と見る在満日本人とは対照的に、李は「中国衰微の象徴」「日本に奪われた風景」として捉えていたのである。双方に共通しているのは、「風景」から「国土」「国力」と、風景にナショナルな意味を付与し解釈している点である。

5. 満洲国時代の鎮江山公園

「満洲八景」公選イベントから2年、満洲事変が勃発した。その翌1932年、「五族協和」「王道楽土」をスローガンとする「満洲国」が建国された。

満洲での桜の名所は、安東鎮江山のほかにも、大連や旅順、金州にも散見する。ただし、鎮江山以外はすべて関東州内に位置するため、桜の名所は「行政区劃から云へば満洲国内では安東だけといふことになる」⁶²。満洲国建国後、満鉄附属地の治外法権の撤廃をめぐる議論が進み、1937年12月1日から、安東を含むすべての満鉄附属地の行政権は満洲国に移譲されることになった。

満洲国建国を境に、鎮江山は満洲国域内唯一の桜の名所として、「母国日本発展の象徴」か

ら「新興満洲国の民族協和」の聖地へと、新たな意味づけを付与されるようになった。

満洲国建国一周年を迎える1933年春、『大連新聞』には「安東へ鎮江山へ／民族協和の宴を張れ」と題される記事が掲載された。「永い間一室に閉ぢこめられた満洲国民よ、安東へ、而して花の下で朗かに笑ひ王道楽土を讚美せよ、民族協和の花の宴を張り国際聯盟の知識不足の小父さん達に見せつけてやれ、満洲国は世界の楽土境である、安東は満洲の楽土境である」と花見を呼びかけている⁶³。

また、「満洲国協和会中央事務局、奉天事務局でも満洲国の楽土境安東の桜の下に民族協和の美しい場面を現はさしめんと宣伝工作大いにつとめラヂオ、蓄音機、大幟、ビラ、ポスター、演芸、覗き、活動写真、煙火、飛行機等、あらゆる奉仕をなすが安東の外客接待委員会と大連新聞安東支局との共同戦線の下に一大楽土境が実現するであらう」と、鎮江山観光を満洲国への認識を深める好機として捉えていることが分かる⁶⁴。

1935年には、花見シーズン直前に、安東景勝委員会は満洲航空会社に依頼して満洲国国旗のデザインである五色の宣伝ビラ20万枚を奉天の空からばら撒いた⁶⁵。

1937年、満鉄が製作した観光映画『内鮮満周遊の旅・満洲編』（28分）は、ラストシーンに鎮江山の花見風景を大きく取り上げた。さまざまな民族が満洲国の「楽土」で楽しんでいることをアピールしているかのように、花見客には和服を纏う日本人だけでなく、朝鮮服の朝鮮人男性やチャイナドレスの中国人女性も映っていた。

そして、映画のナレーションはこう締めくくられている。

歌の鴨緑江、歌の安東県。いよいよ満洲とお別れであります。安東は最近、満鮮かけて

立派な花の名所となりました。この旅の終わりに際し、桜の花がこんなにも満洲で成長するかを考えていただきたいと思います。日本、朝鮮から川一つ越して満洲の土地にこんなにも桜花爛漫、木は根深く培われて、春四月には、花はこの国境を埋め尽くすのであります⁶⁶。

ここでは、満鮮国境まで埋め尽くしている桜の海はまさに帝国日本の発展・膨張を象徴する「帝国の風景」そのものだと強調されている。

興味深いことに、満洲国時代後期に入ると、桜のシンボリックな意味づけは少し変化を見せている。気候風土の関係上、桜は南満の海岸近く以外、即ち満洲国の大半の地域には育たないらしい。1940年4月から全満各地の戦跡、忠霊塔、神社、学校等に桜10万本植樹計画も進められているが、これまでの失敗の経験から、桜は満洲国の寒い地域に向いていないとの結論に至った。満洲北部吉林省の満洲桜や樺太、北海道などの寒地産の桜を移増殖するにしても、「開花期が遅く日本内地のやうな鑑賞には適さぬなど難点が多い」⁶⁷のである。

そこで、1940年には、「杏の花」を満洲国の国民花にしようという「杏国民花運動」が提唱され、国都新京の近郊に5万本の杏樹林を作る計画が発表された。杏の花が選ばれた理由として「日本の風土にびつたり適ひ日本人の気もちを充分に示す『さくら』に対し全満ことに興安南西省に多い『あんず』の花が桜に劣らぬ集合性に富み協和国民たる表徴に相応しいばかりかその香は道義国家の仁愛に充分通じ、しかも歴史的に全満の民衆から親愛されてゐる上にその実は薬用、食用に供される」といった点が挙げられている⁶⁸。

つまり、現実問題として満洲国の多くの地域での桜の移植が難しいし、満洲国民の大半を占める「満人」は桜やお花見に親しんでいない。

すなわち、桜は帝国日本の満洲進出の象徴にはなり得たとしても、「五族協和」を唱える新興満洲国の「国民花」としては、相応しくないとのことである。

6. まとめ

ここまで見てきた通り、戦前日本が満洲で人為的に作った風景「鎮江山」の形成史にはさまざまな制度的・国家的な力関係が働いていた。鎮江山は日露戦争中に軍のバックアップのもとで一布教僧によって開山され、そこに「日本発展の象徴」として桜が移植された。その後、満鉄によって近代的な森林公園として整備され、1929年には『大連新聞』主催のメディア・イベントによって「満洲八景第一景」として選ばれた。「満洲八景」による権威付けは、その後の鎮江山の観光誘致に拍車をかけた。

さらに、満洲国時代に入ると、鎮江山公園は満洲国域内唯一の桜の名所として、「王道楽土」を表すショーウィンドーとして、また満洲国への認識を深める宣伝舞台として活用されるようになった。

本稿は、このような鎮江山公園の歴史的経緯を多くの文献史料によって跡づけながら、風景の背後に絡み合っている制度的・社会的諸関係を明らかにし、風景の形成・改変・馴致の中にいかなる帝国の暴力が内包されているかを解明することを試みた。これは、「風景と権力」という問題に接近する、ひとつの事例研究である。

一方、鎮江山公園は日本人だけが独占した隔離されたものではなく、現地の中国人や朝鮮人の生活空間の一部にもなっていた。これはまさにMary Louise Prattが「接触領域」(Contact Zone)と呼ぶ空間である⁶⁹。この「接触領域」のなかで、鎮江山公園の近代的な部分（電飾）に惹かれながらも、風景の変貌から国力の衰微を痛感する——このような中国知識人の葛藤

は、中国の地方誌に収録された漢詩の内容からも、はっきりと読み取ることができる。

戦後、満洲時代の多くの施設と同様に、鎮江山公園にある日本的なものも一掃された。臨済寺や安東神社、表忠碑などは取り壊され、1949年10月には、公園の中心地に「遼東解放烈士記念塔」が新たに建てられた⁷⁰。1965年、安東市が「丹東市」と改名されたのに伴い、日本人に命名された「鎮江山」の名前も「錦江山」という名に改められた。丹東市政府の公式サイトでは、満洲時代に与えられた「満洲八景第一景」の称号も、「東北八景第一景」と言い換えられている⁷¹。戦後、鎮江山公園にはツツジが多く植栽され、1983年に丹東市は市の花をツツジと定めた⁷²。桜の木は今も健在しているものがあるが、木に掛けてある説明板は桜の出自や満洲時代のことには一切触れていない。今後、戦後の鎮江山公園の変貌を視野に入れて、ポストコロニアル期における風景と権力の関係について考察を続けたい。

注

- W.J.T.Mitchell, ed., *Landscape and Power*, The University of Chicago Press, 1994. 1
- 顔亦如「日治時期在台日人の植桜と桜花意象：『内地』風景的発現、移植と桜花論述」『台湾史研究』第14巻第3期、中央研究院台湾史研究所、2007年9月
- 竹国友康『ある日韓歴史の旅——鎮海の桜』朝日新聞社、1999年
- 大貫恵美子『ねじ曲げられた桜』岩波書店、2003年、197-198頁
- 1916年12月16日『中央新聞』3面
- 1916年12月16日『中央新聞』3面
- 大山元帥伝刊行会編『元帥公爵大山蔵』大山元帥伝刊行会、1935年、585-588頁
- ACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081607600、在清国本邦布教者状態取調之件（B-3-10-1-23）（外務省外交史料館）、第12画像目
- 陸軍省『明治三十七八年戦役満洲軍政史』第2巻上、1917年、56頁。なお、安東軍政署初代軍政官・松浦寛成は在任期間がわずか一ヵ月で、ほとんど軍政署開設の準備に終始した。そのため、大原武慶は「事実初代軍政官の名に値するもの」といわれている。

- 大津峻・述『安東今昔物語』安東文話会、1943年、18頁
- 10 近藤松五郎・述『陳天閑話』安東文話会、1943年、33頁
- 11 村田何休「創業の人・守成の人」『正法輪』324号、正法輪発行所、1914年7月、20-22頁；近藤松五郎・述『陳天閑話』安東文話会、1943年、33頁
- 12 関東局文書課編『関東局施政三十年業績調査資料』関東局文書課、1937年、713頁
- 13 山崎惣興『満洲国地名大辞典』日本書房、1937年発行、1941年第3版、20頁
- 14 細野南岳「満鮮行脚(6)」『正法輪』第613号、正法輪社、1926年12月1日、7頁
- 15 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』南満洲鉄道株式会社、1939年、796頁
- 16 関東局文書課編『関東局施政三十年業績調査資料』関東局文書課、1937年、713頁；茶木清太郎編『安東誌』安東県商業会議所、1920年、118-119頁
- 17 細野南岳「満鮮行脚(5)」『正法輪』第611号、正法輪社、1926年11月、8頁
- 18 細野南岳「満鮮行脚(5)」『正法輪』第611号、正法輪社、1926年11月、8頁；細野南岳「満鮮行脚(6)」『正法輪』第613号、正法輪社、1926年12月、7頁
- 19 細野南岳「満鮮行脚(5)」『正法輪』第611号、正法輪社、1926年11月、8頁；近藤松五郎・述『陳天閑話』安東文話会、1943年、67頁
- 20 『正法輪』第800号、妙心寺正法輪社、1934年9月15日、10-11頁
- 21 『正法輪』第607号、正法輪社、1926年9月1日、6頁；『正法輪』第769号、妙心寺正法輪社、1933年6月1日、20頁
- 22 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』南満洲鉄道株式会社、1939年、728-729頁
- 23 中西敏憲「満鉄附属地に於ける緑化事業」『公園緑地』第4巻第9号、公園緑地協会、1940年9月、19頁。なお、白澤保美の肩書きは大蔵省印刷局編『官報』日本マイクロ写真、1912年9月24日、395頁による。
- 24 杉本文雄「満洲に於ける公園(4)」『庭園と風景』第14巻第4号、日本庭園協会、1932年4月、121-122頁
- 25 「安東經理係」は安東地方事務所の前身にあたる。南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』南満洲鉄道株式会社、1939年、728-729頁、817頁。なお、「松本襲逸」と表記する史料もあるが、本稿は『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』(730頁)に従って、「松本襲逸」と表記する。
- 26 中西敏憲「満洲緑地の恩人松本襲逸氏」、『公園緑地』第4巻第9号、公園緑地協会、1940年9月、88-89頁
- 27 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』南満洲鉄道株式会社、1939年、730頁、817-818頁
- 28 南満洲鉄道株式会社地方部庶務課編『地方経営統計年報 昭和元年度』南満洲鉄道地方部庶務課、1928年1月、182頁
- 29 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』南満洲鉄道株式会社、1939年、794-795頁
- 30 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B03050423300、各国事情関係雑纂／支那ノ部／安東 第1巻 (B-1-6-1-305) (外務省外交史料館)、37画像目
- 31 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』南満洲鉄道株式会社、1939年、795頁
- 32 高媛「租借地メディア『大連新聞』と『満洲八景』」、『Journal of Global Media Studies』第4号、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、2009年3月、21-33頁
- 33 1929年4月10日『大連新聞』夕刊2面
- 34 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B02130048700、支那在留本邦人及外国人人口統計表(第22回)／昭和4年12月現在 (B-亜-43) (外務省外交史料館)、第2画像目
- 35 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B02130048700、支那在留本邦人及外国人人口統計表(第22回)／昭和4年12月現在 (B-亜-43) (外務省外交史料館)、第1画像目
- 36 1930年11月14日『大連新聞』6面
- 37 1930年11月14日『大連新聞』6面
- 38 1930年11月14日『大連新聞』6面
- 39 1929年3月23日『大連新聞』夕刊3面
- 40 1929年3月31日『大連新聞』夕刊3面
- 41 1929年4月16日『大連新聞』5面；山本繁之輔『安東』安東商工会議所、1936年、36頁
- 42 1931年4月11日『大連新聞』夕刊2面；1931年4月17日『大連新聞』夕刊2面
- 43 1930年10月15日『大連新聞』5面；1930年11月10日『大連新聞』3面
- 44 1929年11月18日『大連新聞』3面
- 45 1932年4月15日『大連新聞』5面
- 46 1930年4月8日『大連新聞』5面
- 47 ジャパン・ツーリスト・ビューロー満洲支部編『満支旅行年鑑 昭和十五年』、博文館、1940年、106頁
- 48 1936年2月26日『大阪朝日新聞満洲版』5面；『安東経済時報』187号、安東商工会議所、1936年6月25日、18頁
- 49 1936年5月14日『大阪朝日新聞満洲版』5面
- 50 顔杏如「日治時期在台日人の植桜与桜花意象：『内地』風景の發現、移植与桜花論述」『台湾史研究』第14巻第3期、中央研究院台湾史研究所、2007年9月、119-124頁
- 51 1935年4月24日『大連新聞』3面
- 52 1931年4月16日『大連新聞』5面
- 53 1933年4月23日『大連新聞』5面

- ⁵⁴ 『泰東日報』は1908年11月3日金子平吉が『遼東新報』の漢文版を独立させ、創刊させた中国語新聞である。1919年12月現在の発行部数は2,800部である。太田誠編『雪齋先生遺芳録』振東学社、1938年、159頁；JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B03040888800、新聞雑誌ニ関スル調査雑件／支那ノ部 第5巻（B-1-3-2-077）（外務省外交史料館）、第2画像目
- ⁵⁵ 1925年7月27日『泰東日報』3面；1925年8月21日『泰東日報』4面
- ⁵⁶ 1929年4月26日『泰東日報』4面
- ⁵⁷ 『東北人物大辞典』編委会編『東北人物大辞典』遼寧人民出版社・遼寧教育出版社、1992年、906頁
- ⁵⁸ 永田正吉「安東鎮江山公園」『庭園』第5巻第2号、庭園協会、1923年2月、16頁
- ⁵⁹ 王介公編『安東県誌』（巻1）1931年6月、36-45頁
- ⁶⁰ 前人「夜遊鎮江山」、王介公編『安東県誌』（巻1）1931年6月、46頁
- ⁶¹ 李洵「独遊鎮江山」、王介公編『安東県誌』（巻1）1931年6月、46頁
- ⁶² 石敢当「満洲随話（2）」『月刊満洲』第9巻第2号、月刊満洲社、1936年2月、75頁
- ⁶³ 1933年4月14日『大連新聞』4面
- ⁶⁴ 1933年4月6日『大連新聞』5面
- ⁶⁵ 1935年4月22日『大連新聞』4面
- ⁶⁶ 南満洲鉄道株式会社提供、満鉄映画製作所『内鮮満周遊の旅・満洲編』、1937年
- ⁶⁷ 1940年2月23日『満洲新聞』夕刊2面
- ⁶⁸ 1940年2月23日『満洲新聞』夕刊2面
- ⁶⁹ Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, 2nd. Edition. NY: Routledge, 2008.8
- ⁷⁰ 丹東市地方史辦公室編『丹東市志2』1996年、136頁；丹東市地方史辦公室編『丹東市志9』遼寧科学技術出版社、1991年、365頁
- ⁷¹ 丹東市政府公式サイト <http://www.dandong.gov.cn/a/lyyoupindao/lyyoujingdian/2011/1104/2281.html>（2012年12月10日アクセス）
- ⁷² 丹東市地方史辦公室編『丹東市志2』1996年、137頁、140-141頁